2018年２月４日（日）「穢れの根源」

マタイ 15:10-20

10 イエスは群衆を呼び寄せて言われた。「聞いて悟りなさい。 11 口に入る物は人を汚しません。しかし、口から出るもの、これが人を汚します。」

12 そのとき、弟子たちが、近寄って来て、イエスに言った。「パリサイ人が、みことばを聞いて、腹を立てたのをご存じですか。」 13 しかし、イエスは答えて言われた。「わたしの天の父がお植えにならなかった木は、みな根こそぎにされます。 14 彼らのことは放っておきなさい。彼らは盲人を手引きする盲人です。もし、盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むのです。」

15 そこで、ペテロは、イエスに答えて言った。「私たちに、そのたとえを説明してください。」 16 イエスは言われた。「あなたがたも、まだわからないのですか。 17 口に入る物はみな、腹に入り、かわやに捨てられることを知らないのですか。 18 しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。 19 悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。 20 これらは、人を汚すものです。しかし、洗わない手で食べることは人を汚しません。」

【序論】

先週に引き続き「汚(けが)れ」の問題を扱います。私たちが一般的に「汚(けが)れる」という言葉を使う時、どのような状況が想定されるでしょうか。ただ単に、手が汚(よご)れると言うのとはニュアンスが違う気がします。「汚れる」と書いた時に、日本語では「よごれる」とも「けがれる」とも読める。同じ漢字でありながら、聞く人が受けるイメージは大分違うのではないでしょうか。「よごれる」と言った場合、何か物質的に汚いものが付くが、洗い落とすことのできるもののように感じる。一方、「けがれる」と言った場合、精神的な醜さ、簡単には取り去ることのできない何かが（目には見えないけれど）「こびりついてしまった」という感覚があるのではないか。子ども同士で「〜菌」と言って、タッチし合うイジメがどこの地域でも起きます。そんなことをしたからといって、物質的な「よごれ」が移るわけはないことは、皆分かっているでしょう。しかし、彼らは知らずして精神的な問題を扱っているのです。勝手に作り上げた「けがれたもの」というイメージを移し合うと言いましょうか。たとえ、その被害者に「けがれ」なんてものがなかったとしても、そのようなイメージが一人歩きしていく。それがイジメ、差別というものだと思います。これは大人の世界でも更に陰湿な形で起きていることです。

【本論】

今日の箇所は先週の続きです。15 章に入ってすぐ、パリサイ人・律法学者が登場し、主イエスの弟子たちが「洗い」の儀式を行なわずにパンを食べているのを咎めた。それに対する主イエスの反論は、律法の本質ではなく表面ばかりを行なって満足している彼らへの厳しい審きのメッセージとなりました。

本論１．ユダヤ教／旧約聖書の規定を覆すイエス

イエスは群衆を呼び寄せて言われた。「聞いて悟りなさい。口に入る物は人を汚しません。しかし、口から出るもの、これが人を汚します。」（15:10-11）

群衆を呼び寄せて真理を伝えるところには、彼らを律法学者の教えの呪縛から解く目的があります。民衆は聖書の教えに従って生きるためには、聖書の専門家の教えに従うのが最も安全でふさわしい道だと信じていた。事細かに決められた「生き方」のマニュアルがあれば、その通りに生きればよいと考えるのが人間というものでしょう。新しく買った家電は、その使い方をよく説明してくれているマニュアルを読むことで、最大限の機能を駆使することができる。それと同じ感覚で、ユダヤ教は聖書の律法に適う生き方のマニュアル本を作り上げたことになります。この時にはこうしなさい、こういうケースはこう処理しなさい…と。しかし、そこには根源的な落とし穴があった。規則を守ってさえいれば自分は大丈夫だという、「心」の欠落した宗教が形成されていったのです。律法学者の教えに従うとは、形骸化した宗教を自らの内に形成することを意味する。主イエスは民衆を律法学者の呪縛から解放するために御許に呼ばれたのです。

「**口に入る物は人を汚しません。しかし、口から出るもの、これが人を汚します**」という教えは、現代に生きる私たちが聞いても何の違和感もなく入ってくるのではありませんか。「口に入る物」とは食べ物、「口から出るもの」とは言葉です。後で説明がありますが、人は何かを食べると、必要な栄養分が体内に摂取され、不要なものは排泄されるようにできています。その食べ物自体が人を汚すのではない。しかし、人が語る言葉は、自らを汚し、他人をも汚し得るものです。言葉の暴力は他人を傷つけ、同時に、語った本人にとっても、知らずして傷を与える言葉となる。発した言葉は自分の耳に入り、心にも入り込む。

こんな当たり前のことを主は言われたのですが、この当時の人々にとっては当たり前ではなかった。彼らは旧約聖書で言われていることを絶対的な権威としていたからです。レビ記 11 章には食べてよい動物と食べてはいけない動物についての規定が詳細に記さ

れています。例えば、ひづめが分かれていて反芻するものは食べてもよい、しかし、反芻しないものは食べてはいけない。「汚れた動物」と見なされるものとしては、らくだ、岩だぬき、野うさぎ、豚など。水中に生きるものでは、ひれや鱗のないもの。その他にも、鳥類、虫類に関することも詳細に書かれています。このような分類は、衛生的な意味で言われているのではありません。一つの象徴として、神の民が異教の民族の直中でヤハウェなる神だけを神とすることを強く意識づけるために与えられた規定なのです。ユダヤ人は、言われた通り、この規定に従って食用とそうでないものとを見分けた。これは神の民にとって当然のことであった。神の戒めに従うことで従順を表すからです。

ところが、主イエスはここでこれらの食物規定に変更をもたらそうとしておられる。すべての食べ物はきよいと言われた。これは革命的な新しい教えです。ユダヤ人の常識、何千年も守り続けてきた伝統が根底から覆されようとしている。なぜ主はそのようなことをされるのか。それは、どうしてもこれらの規定に従うことのできない立場の人々がいたからです。律法を守れない人々にも救いを与えるためです。祭儀律法に変更がもたらされなければ、福音は広まらないという、時代の転換点に立っていることを、主イエスは認識しておられた。主イエスが遊女・取税人・罪人を招いて食事をするところには、食物規定というものがあることさえ知らず、それに従わず、それゆえに軽蔑されている人々にも福音を宣べ伝えるためだったのです。

本論２．神が植えなかった人々

そのとき、弟子たちが、近寄って来て、イエスに言った。「パリサイ人が、みことばを聞いて、腹を立てたのをご存じですか。」（15:12）

パリサイ人たちはなぜ腹を立てたか。それは、彼らの生き方も権威も何もかもイエスが否定したからです。また、ユダヤの宗教に巨大なパラダイム転換がもたらされようとしていたことへの強い懸念を覚えたとも言えるでしょう。主イエスが否定されたのは、彼らのおびただしい伝承だけではありません。祭儀律法そのものを廃棄しようとしておられるのです。聖書という唯一の神の戒めを一体誰が変更できるか。主イエスがなさっていることは恐るべきことであります。神の子でなければできない。神ご自身にしか聖書の言葉を変えることはできないのです。人々から見て、イエスのやっていることは冒瀆に映ったことでしょう。

パラダイム転換が起きようとする時、新しい考え方を提示する人は必ず迫害を受けます。従来の考え方を変えていくためには、莫大なエネルギーを要する。時には命を失うこともあります。長いものに巻かれ、不正がまかり通っている社会の中で、真理を語っ

ていくならば、その人は攻撃を受け、抹殺されるかも知れません。

弟子たちが主イエスに現状報告をした背景には、パリサイ人たちが主イエスご自身にではなく、弟子たちに警告したことがあったと思われます。「お前たちの師匠に言っておけ」と脅されたのでしょうか。弟子たちも震え上がったかも知れません。ユダヤ教自体を敵に回してしまったら、俺たちの生きる道は失われるのではないか。村八分に遭うのではないか…と。弟子たちも主イエスに「もうやめましょうよ」と手綱を締めるつもりで報告したのかも知れません。

しかし、イエスは答えて言われた。「わたしの天の父がお植えにならなかった木は、みな根こそぎにされます。彼らのことは放っておきなさい。彼らは盲人を手引きする盲人です。もし、盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むのです。」（14:13-14）

主イエスの毅然とした態度！主はどんな脅しに遭ったとしても、ご自分の主張を決して曲げることはなさらない。真理を語り、真理を行なうこと、それだけなのです。更に、追い打ちをかけるかのように、「**彼らのことは放っておきなさい**」と言われる。彼らは神に属する者ではないと。もし彼らに従っていけば、そこには滅びある。「**盲人を手引きする盲人**」とは、面白い表現ですが、この譬の意味は至って単純です。盲人が別の盲人を連れて行けば、道に迷うほかないのだということを、比喩的に言っておられるのです。

何事でも、指導の任に当たる人は、教える事柄を十分に把握していなくてはなりません。そうでないと、教わる方は道に迷ってしまうからです。福音を伝える人は、福音を知っていなくてはならない。いえ、知っているだけでは不十分で、福音に生きていなくてはならない。そうでないと、伝えられる方は福音を知ることも、福音に生きることもできないからです。律法主義者が聖書を教えればどうなるか。もう一人の律法主義者が生まれるのです。だから、主は彼らに着いて行ってはいけないと言われる。

本論３．汚れは人の心にあり

そこで、ペテロは、イエスに答えて言った。「私たちに、そのたとえを説明してください。」（15:15）

15 節以下の内容は、恐らく 11 節から続いているでしょう。12〜14 節を挿入部分として見ると、11 節と 15 節はよくつながるのです。ペテロが尋ねている「たとえ」とは、「**口に入る物は人を汚しません。しかし、口から出るもの、これが人を汚します**」（11 節）のことだと思われます。ペテロにはこの教えの意味が分からなかった。私たちでも理解できることが分からない。それは、彼らも当時のユダヤ教の常識にどっぷりと浸かって生きてきたからです。生まれながらにして、「食べた物によって汚れる」ということを刷り込

まれてきている。「レビ記で語られているからそうなんだ。食物には浄・不浄の区別があるんだ」、そう教えられてきたのであれば、それは彼らにとっての常識なのです。だから主が言われることが分からない。「そのたとえ」（τὴν παραβολὴνταύτην）とは「謎」という意味を持つ言葉です。弟子たちにとっても主イエスの言われることは謎でした。

イエスは言われた。「あなたがたも、まだわからないのですか。口に入る物はみな、腹に入り、かわやに捨てられることを知らないのですか。しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。（15:16-18）

すべての食べ物に害がないかと言えば、そうとは言えないかも知れません。添加物が大量に入った食品は体に害を及ぼします。しかし、それは突き詰めると、そのような食品を作る人間の「心」の問題へと行き着く。それを食べると、人体にどういう影響が出るかということを知っていながら、作り、販売していたとするならば、そこにはやはり倫理的な問題が潜んでいることになるでしょう。良いものを悪く使うのが人間。つまり、「心」の問題なのです。

悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。これらは、人を汚すものです。しかし、洗わない手で食べることは人を汚しません。（15:19-20）

この悪徳リストは、並行記事にも違った形で登場します。マタイは十戒の順序に従っているのが特徴です。「悪い考え」はすべての悪行の根源。その証拠に、「殺人」（殺意）は怒り、憎しみから導き出されます。「姦淫」と「不品行」が並べられていますが、これらは既婚・未婚を問わず、すべての結婚外の性的行為を網羅しています。「盗み」も何らかの計画に基づいてなされる不道徳な行為です。「偽証」はあらゆる嘘を意味し、それが神の御名によってなされることさえある。「ののしり」は神を冒瀆すること、隣人を中傷することの両面が含まれるでしょう。

何かを食べてもこれらの悪徳を生み出さないことは、誰もが知っているはずです。すべては人の心の問題なのです。子どもたちが「〜菌」と言ってタッチし合うところには、そういうことをする子ども自身の「心の汚れ」が露呈されていると言えるでしょう。

【展開】

主イエスは山上の説教の中で「**心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう**」（マタイ 5:8）と言われました。裏を返せば、心が清くなければ神を見ることはできないのです。心の清さとはどこから来るか。私たちの生来の心には清さがないということを、誰もが知っているでしょう。清さは神からしかもたらされない。聖霊がその心に宿ることなくして、私たちの心は清くなり得ないのです。

【結論】

私たちの心には聖霊が宿っているか。それがすべてであると言ってもよい。私たちが律法的な生き方から離れようとするならば、聖霊の助けを得なくてはなりません。聖霊の内在によってこそ、私たちは神との血の通った関係に生きることができるからです。そして、生来の悪い心に聖なるキリストの心を植えていただくのです。その「心」は私たちを本来あるべき状態へと近づけていくでしょう。私たちを悪の束縛から解放し、神の御心を行ないたいという渇望を与える。それこそが聖霊の働きであります。

【祈り】

御霊なる神よ。エレミヤが言うように、人の心は何よりも陰険で治りません。自分が心の中で密かに思っていることを知っているのは自分です。このような者が神を見ることができるのでしょうか。「心のきよい人は幸いである」という主イエスの御言葉が身に沁みます。御霊によって生きさせてください。御霊の内在によってこそ、私たちはきよくなることができるからです。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
万物を「良きもの」として造り、人類に与え給うた、父なる神の愛。
祭儀律法を更新し、罪人を福音のうちに招き給うた、主イエス・キリストの恵み。
信じる者のうちに宿り、その心の泉をきよめ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。